

# 古文書倶楽部

【発行】  
秋田県公文書館  
2016.5  
第71号

## フォームに乗ってみたら：

「秋田藩家蔵文書」ほか

大河ドラマ「真田丸」が好調です。信州の友人によると、週末には上田城や記念館が観光客でごったがえしているとか。この人気にあやかるうと、全国の「真田ゆかりの地」が関連イベントやキャンペーンを展開しています。秋田でも亀田藩主に嫁いだ真田信繁の娘・お田の方のキャラクターが登場しました。

流行に乗って当館にも真田ゆかりの史料がないか調べてみたところ、データベースに「真田昌幸書状」の文字が！昌幸と言えば信繁の父。ちなみにこの役を演じる某ダンディ俳優、三十年前には別の真田ドラマで主人公の信繁役をつとめていますから、よくよく真田にゆかりのある方です。

古文書倶楽部 第71号 (2016年5月号)  
さて、件の史料は「秋田藩家蔵文書24」(A二八〇―六九―二四)の文書です。古文書倶楽部愛読者の皆様はご存じのとおりに、家蔵文書とは藩が家中から

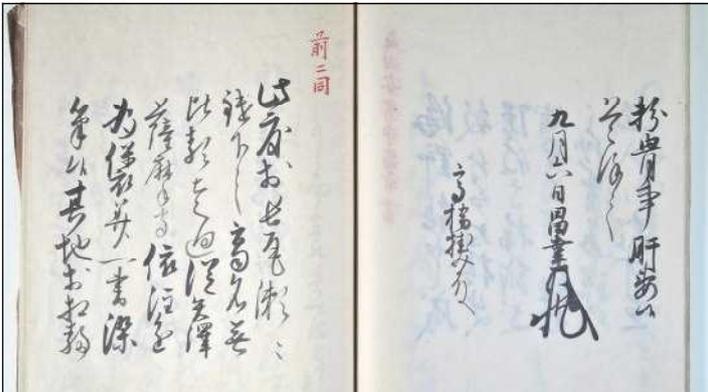
六月七〜十三日は特別整理期間のため休館です。ご迷惑をおかけして申し訳ありませんが、よろしくお願いいたします。

集めた所蔵文書を書き写したものの。つまり、残念ながら昌幸の真筆ではありません。所蔵者は小野寺桂之介道宴とあります。

この人物に関する史料がないか調べてみたところ、ありました。「諸士系図 遠部」(A二八八・二一五九〇―一五)と「小野寺氏系譜」(A二八八・二一三三二)です。これらによると道宴の先祖である道元は、小野寺の前は高橋を名乗っており、北条氏政や武田勝頼のもとで戦功をあげたのち、真田昌幸に仕えます。天正十年(一五八二)、長尾瀬と岡谷(いずれも「国



右・観光客で賑わう上田城  
(平成二七年撮影)  
下・「真田昌幸書状」



郡未詳)で「鎗下の高名」をあげ、昌幸が書状を授けたということなのですが…。

実は、「真田昌幸書状」は二通あるのです！どちらがその書状なのか、そもそも二通はどう違うのか…。まずは、実際に見てみませんか？原本以外にも閲覧室の複製本や、公文書館のデジタルアーカイブでご覧いただけます。

【鍋島 真】

## 公文書館講座のお知らせ

平成二八年度の公文書館講座の日程は次のとおりです。

### ◇古文書解読講座Ⅰ(全4回)

①・② 7/1 ③・④ 7/8

### ◇古文書解読講座Ⅱ(全4回)

①・② 7/15 ③・④ 7/22

会場：公文書館多目的ホール

### ◇アーカイブズ講座

① 7/29 ② 10/28

会場：県生涯学習センター

古文書解読講座は午前一〇時半〜一二時、午後一時半〜三時の開催です。アーカイブズ講座は午後一時半〜三時の開催です。

テーマ・講師等の詳細については、五月下旬に館内掲示やHPでお知らせします。お申込みはそれ以降にお願いいたします。

古文書こぼればなし

### 忠長卿遺臣の血脈

—「平姓土屋氏系図」などから—

三代將軍徳川家光の弟駿河大納言忠長が兄家光に反発し、常州高崎に幽居の後、自害した事件はあまりにも有名です。しかし、その忠長に仕えた遺臣の動向は必ずしも明確ではありません。ところが諸家の系図を紐解くうちに、初期秋田藩士の中にその血脈を受け継ぐ家が存在したことに気がつきました。

それは明和・安永期に藩家老を務めた土屋知虎の先祖でありました。その経緯について、文化二年（一八〇五）土屋知寄が提出した「平姓土屋氏系図」（A二八八、二一三五一）に基づき見てゆきます。

まず、この土屋氏になる以前の本姓は秀郷流藤原氏の分流である小野寺氏でした。系図の初代となる道貞の通称は弥五左衛門であり、寛永七年（一六三〇）父道白の子供として誕生しました。しかし、父道白の仕える徳川忠長の自害によって四歳にして流浪の身となりました。寛永一四年八歳のとき、縁あって江戸に出て幕臣土屋忠兵衛知定に養育されることになりました。土屋知定には子供がなく、道貞を嗣子にしようとして頼み出しましたが、罪人の遺臣の子供ゆえ幕府の許可は得られませんでした。

古文書倶楽部 第71号 (2016年5月号)  
去により、道貞は宇和島藩伊達左京亮宗則の招

きでその地に赴き、禄高二百五十石の好待遇を得ました。その後、再び土屋家に戻り寄食します。延宝期になり津軽信政に仕え、最後は貞享四年（一六八七）、嫡子知道の居宅で波乱の生涯を終えました。彼の一生を眺めて感ずるのは、才能を買われて諸侯の好待遇を請けながら、「故あって」短期間で職を去らなければならなかったことです。そこまで忠長卿事件の影を引きずったものとみられます。

嫡子知道の時代になると、時代の空気も変わり、秋田藩主に仕え世子の近習を務めたと記されています。彼は幼年期に土屋知定の養孫として土屋姓を名乗り、「知」の一時を名に加えました。これを間接的に証明する資料としては、「土屋氏文書写」（県A一四七）中の「梅津半

土屋氏系図抄録

本ハ藤原姓小野寺氏  
後二平姓土屋氏ヲ名乗ル

○道貞（小野寺大学・弥五左衛門）

寛永七（一六三〇）〜貞享四（一六八七）五十八歳

○知道（五郎八・藏人）

寛文七（一六六七）〜元禄七（一六九四）二十八歳

○知見（喜世之助・富之丞・藏人主）

元禄二（一六八九）〜元文三（一七三八）五十歳

○知虎（外之助・富之丞・弥五左衛門）

享保九（一七二四）〜寛政六（一七九四）七十一歳

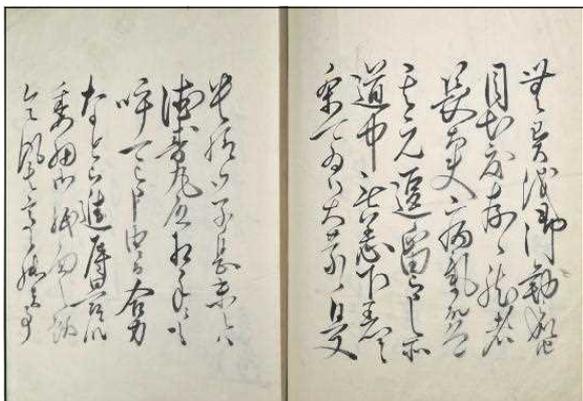
（以下略）

右衛門忠宴書」があります。おそらく延宝年間と推定されるこの文書は、忠宴から道貞（小野寺弥五左衛門）に充てたものであります。その内容は「貴様御子息末々は徳寿丸殿（義処）相手二も」任じられるだろうというものです。しかし、知道は元禄七年（一六九四）二十八歳の若さでこの世を去りました。

その子供知見は藩主義処の時代に宿老になったとされますが、歴代宿老の中にその名は見当たりません。彼には子供がなく後藤家から養子を迎え知虎と名乗らせました。ここに忠長卿遺臣の血脈は途絶えました。

以上、忠長卿事件に関わった秋田藩士土屋家の苦悩の道を述べてきましたが、一つの事件が多くの牢人を生み出し、諸国に波及したことを思うにつけ、感慨深いものがあります。

【加藤民夫】



上・「平姓土屋氏系図」より作成

下・「梅津半右衛門忠宴書」